

若い世代に広がる新しい住まい方

インタビュー(2012年4月2日)

コミュニティ型シェア居住

永瀬泰子
ながせ やすこ
有限会社Come on UP
代表取締役

今、新しい住まい方としてシェアハウスが注目を集め、全国的な広がりを見せ始めています。これまで、恵比寿や吉祥寺など、東京を中心にシェアハウスを展開してきた(有)Come on UPも、2012年の春に関西へ進出、大阪と京都でもシェアハウスの運営を開始しました。そのひとつ、大阪でオープンしたばかりの「シェアハウス緑橋」に代表の永瀬泰子さんを訪ね、同社がコンセプトとするコミュニティ型シェア居住の現状とその可能性についてお話をうかがいました。

自律心のある人に 交流と成長の場を提供

— 東京を中心に、最近は若い世代でシェアハウスの人気が高いと言われます。そもそもシェアハウスとはどういうものですか？

簡単に言えば、他人同士がひとつ屋根の下をシェアして暮らす居住スタイルです。実際の形はいろいろで、普通の一軒家に数人で住むものから、管理会社が共用スペースを運営するマンション規模のものまで、今は全部シェアハウスと言っていますね。

私たちの場合は、主な対象が20〜30代の社会人で、基本は戸建ての個室。台所やリビングなどを

共に使い、洗濯機や冷蔵庫などの電化製品も共用。掃除などは当番です。

でも、一番大切なのはその目的。男女数人の共同生活を通して、自律心のある人たちが交流しながら互いに成長していこうというものです。

— そうしたコンセプトを持っているのがコミュニティ型ということですね。

ええ。最近は「シェアハウス」という言い方が多くなってきましたが、以前は「ゲストハウス」とも言いました。

でもゲストではなく、自分たちで家を育てていくというのが、私たちの考え方です。

だから、ここに住むのは、いろいろなバックグラウンドの方々と交わることで自らの成長を志向する人たち。ただの仲良しハウスではないですね。シェアハウスの良さは、暮らしていく間に、自分とは別の価値観があることを知り、自らの殻を破るための、良い刺激を受けることができる場所にあるんです。

— 永瀬さんがシェアハウスを起業されたきっかけは？

私自身、16歳の時に渡米してから、海外に住んだ期間が長く、それ以降も寮やシェアハウスが多かったんです。その経験から、いずれは日本でも「シェアするライフスタイル」が定着する時代がくるだろうと確信していました。数年前、日本で自分が住むシェアハウスを探していたのですが、なかなかいいところがない。だったらこれを事

業として自分がやろうと。

それともうひとつ、私は学生の頃から、趣味で交流イベントをよく開催していました。そこではいろんな人と出会えてほんとうに楽しい。ところが、その日は盛り上がりつつも、後の継続性が乏しい。だったら一緒に住んでしまえばいい、毎日が交流の場になるんじゃないかと、ずっと思っていたんです(笑)。

新しい展開を見せる シェア居住の文化

— 日本でもシェアハウスが急速に広がっています。その背景は？

今はコミュニティが希薄化しています。ネット社会、バーチャル社会と言われていますが、人は必ずしもそれで満足できるわけではない。よりリアルに人とのつながりを感じたいという思いは強く、シェアハウスはそのニーズに応えるものです。

シェアルーム、シェアハウスを含め、欧米では結婚までにシェア居住の経験者は7割と言われますが、日本では5%。むしろバブル期以降は、プライバシーの重視が求められ、個室化が進められてきました。でも、例えば結婚生活はシェアそのものですよね。相手との違いを受け入れないと、一緒に暮らすなんて無理。その意味からも、人生の中でせめて1〜2年でも、シェア居住を経験してみ

るべきだと思います。

— 入居者のターゲットとして、20〜30代の社会人を考えた理由は？

私もそうでしたが、企業に就職しても、そのまま社内の人間関係だけで生きていくことに疑問を持ち、もの足りなさを感じたりしますよね。そんな人のために、例えば異業種交流会に参加するのと同じように、住まいの環境を変えて新しいつながりを見出すことができるような場を提供したいと考えたんです。

ですから、今は住人の多くが会社員。学生は10%程度で外国人が約20%。職種はさまざま、教師、介護士、医者、税理士、デザイナー、それに漫画家やライターの人もあります。

— いろいろな人との交流は、新しいチャレンジへの契機になりそうですね。

ええ、実際に起業した住人もいます。うちの住



古い長屋をリノベーションしたCome on UPのシェアハウス(大阪市東成区)



緑橋シェアハウスのリビングでくつろぐCome on UP代表の永瀬泰子さん。床はDIYで張った無垢の木のフローリング。照明も竹と和紙を使い手づくりしたもの

●プロフィール

1977年東京生まれ。2006年に(有)Come on UPを設立。現在、東京都内で18のコミュニティ型シェアハウスを運営し、2012年春には大阪と京都に各1戸を新規オープン。シェアハウスを人々の成長とチャレンジの機会を提供する場として捉え、シェアハウスでの各種イベントなども企画する。

Come on UPホームページ
<http://www.comeonup-house.com>

人だった東大の建築専攻の院生に、別のシェアハウスのリノベーションデザインを依頼したことがあります。彼はそれを初仕事にして、仲間と設計事務所を設立しました。それから料理人たちが独立してレストランを始めたり、ハウスの人が集まってコソサートを開いたり。うちのホームページデザインも元住人にお願ひしています。本当に多彩な人が集まってくるので、そうしたつながりは、住人それぞれにとっても貴重な財産になっています。

共同生活で必要なのは互いに話し合うこと

—共同生活ということでは、プライバシーの問題はどうですか？

生活音に気をつけるのは当然のこと。キッチンを使うのも、バスやシャワーの利用も時間を譲り合わないといけない。食事は、一緒にする人もいればしない人もいます。各人の生活リズムも異なりますからね。仕事はそれぞれ一生懸命にやり、みんなで楽しむ時には楽しむ。他の人との良い距離のおき方を学ぶことも大切です。

水道光熱費は住人の均等割り。冷蔵庫もシェアなので、利用の仕方も住人同士が話し合って決めないといけない。掃除などの当番もハウスミーティングで決めます。他人同士の共同生活に必要なのは話し合うということですね。

—シェアハウス緑橋では、1階に店舗が入るのですね。

ええ、初めての試みです。緑橋界隈には昔からの商店街もあるし、大阪の下町の雰囲気もまだ残っていますね。最近は若い人たちも入ってきて、地域が元気になってきているようです。この1階は手づくりアクセサリーのお店ですが、お茶を飲めるスペースもつくるので、まちの人にも気楽に入ってきてもらえる。もちろん、住人の行きつけのお店も近所に行けるでしょうし、相互の交流が地域のつながりづくりになると思います。シェア居住は、まちぐるみで関係していくともっとおもしろい。



4月末にオープンした店舗は、地域の人との交流の場に

—地域の人たちと内外装のワークショップもされたそうですね。

照明づくり、床の板張り、ペンキ塗りなど。楽しかったですね。大阪では、まだ多くの人にとってはシェアハウス自体が未知のもの。こういったイベントを通して初めて知った方も多かったようです。先日、ここでオープニングパーティーも開きました。が、関西でもきつと受け入れられるという手応え



今年の4月1日のオープニングパーティではハウス内の各部屋もお披露目



シェアハウス緑橋では、今年2月に再生DIYのワークショップを実施。若者を中心に多くの人が作業に協力

を強く感じました。

シェアカルチャーを海外にもネットワークを海外にも

—永瀬さんご自身、もちろんシェア居住のすばらしさを実感されているのですね。

この事業を始める前は、私はある大手企業に勤めていて、生活はそれなりに安泰でした。それもあってか、いざ開業となった頃に、急に心が沈み、プチひきこもりのようになってしまいました。そこに、最初の入居希望の方が来てくれたんです。それから一緒に住んでくれる人たちが次第に集まってきてくれた。結局、私自身が一番の恩恵を受けたんです。周りの人に支えられて、何とかやってこられたのだと素直に思います。

—最後に、これからの夢をお聞かせください。

日本にもっとシェアカルチャーを広げていきたいというのが第一です。直営だけだと件数も限られてくるので、ノウハウ自体を伝えていきたい。その延長で、海外にも事業を広げていきたいですね。私たちのネットワークが生かされて、それがみんなの夢の実現につながるものになればいいなと思っています。

CEL

—男女比は大体同じですが、その共同生活については？

男女とも、同性だけだと次第にだれてしまいがちで、むしろ異性がいる方がうまくいくようです。男女がひとつ屋根の下に住んでいても、次第に家族のような感覚になるのか、同じハウスの人同士がカップルになる例はとも少ない。どちらかと言えば、誰かが連れてきた人とか、交流がある別のハウスの人とお付き合いすることの方が多いようですね。

シェア居住はまちぐるみがおもしろい

—新しく大阪と京都でシェアハウスの運営を始められましたか、その狙いは？

以前から、シェアカルチャーを日本中に広めたいと思い、東京以外での展開を検討していました。その過程で、お世話してくださった人や物件のご縁があつて、まず大阪、そして京都が決まりました。

また別の意味でも、関西に拠点が必要だと以前から考えていました。例えば、地震などの災害時の対応については、今はハウス同士で助け合おうという協定を結んでいます。そうしたことを含めて、地域を越えたネットワークをさらに育てていきたいですね。

新しくオープンしたシェアハウス緑橋の内部



浴室には、DIYで部材を組み立てて作った檜風呂



洗面台と洗濯機が並ぶ2階の共用スペース



共用のキッチン・ダイニング



和室と洋室があり、大きさはさまざま

■シェアハウス緑橋 概要

大阪市東成区東中本1丁目
木造2階建ての長屋を改修したコミュニティ型シェアハウス
ラウンジ、浴室、トイレほかの共用スペースと個室7室・1階表側に1店舗
共用設備：キッチン家具、ケーブルテレビ、ワイヤレスインターネットほか
運営：有限会社Come on UP / 設計：六波羅真建築研究室